口絵５　文殊菩薩騎獅像　正面　奈良・法華寺

口絵 6　同　光背

7 - 2　同　右脇腹部

口絵 7 - 1　文殊菩薩騎獅像　截金文様　正面左腋部

7 - 4　同　臀部上方

7 - 3　同　背面右腋部

―作品研究―

奈良・法華寺文殊菩薩騎獅像

岩井共二・岩田茂樹・大江克己・佐々木香輔・鳥越俊行・山岸公基・山口隆介

はじめに（調査の経緯）

奈良市法華寺町に所在する法華寺は、光明皇后を開基とし、奈良時代に創建された官寺であり、正式な寺名は法華滅罪之寺、国ごとに設置された国分尼寺を総括する総国分尼寺の地位にあった。現在の本尊は、平安時代初期に制作された檀像彫刻の名品、国宝・木造十一面観音菩薩立像である。

平安遷都後は次第に衰微の途をたどったが、平安時代末の治承四年（一一八〇）、平重衡による南都焼討に罹災し、惨憺たる有様となったようである。復興はまず東大寺大勧進俊乗房重源によって試みられたが、本格的な再興は西大寺叡尊によって進められた。法華寺が近年まで真言律宗に属していたのもこの機縁による。残念ながら室町時代に再び兵火のため焼亡の憂き目を見、現在の寺観は、近世初頭に豊臣秀頼の母淀君が発願し、片桐且元を奉行として行われた再建伽藍である。

同寺本堂の外陣東端、格子戸に隔てられた脇間内に、等身大の十一面観音菩薩立像とともに安置されるのが、ここに報告を行う文殊菩薩騎獅像である。

柳澤保徳氏（法華寺檀家総代、帝塚山学園学園長。元奈良教育大学学長）よりご連絡を受け、樋口教香師（法華寺住職）が本像の調査を希望しておられることを山岸が知ったのは、平成二十四年（二〇一二）九月であった。これより先、平成二十一年二月には、西山厚氏（当時奈良国立博物館学芸部長）・金原正明氏（奈良教育大学教授）とともに同像を台座からお下ろしし、山岸研究室保管のビデオスコープ（径六㎜）の挿入を試みたことがあった[1]が、釘孔はあるものの開口部が小さく果たせなかった。その後径二・四㎜のファイバースコープを購入していたことから、柳澤氏からのお話は渡りに船で、平成二十四年十二月二十八日にファイバースコープ調査の実施が叶った。二・四㎜ファイバースコープは冠繒の孔から頭部内に挿入することができ、頭部上半内部に梵字銘文（図18、19）が記され、納入品（眉間に金属製火焔付工芸品、頭部下半に錦包ほか、図20）が納められていることを見出した[2]。ただ頭部内は紙包、錦包に満ちており、頭部下半内及び体部内は窺うことができず、金属製火焔付工芸品の全体像も不明であった。

このためX線透過撮影の必要性が痛感され、その機器・設備ならびにスタッフを有する奈良国立博物館と協議したところ、博物館としてもそのことの意義は大きいと判断し、共同調査を実施する方向

図１　文殊菩薩騎獅像　全図　奈良・法華寺

で調整に入った。

なお本像については『大和古寺大観』第五巻に掲載され、基本的な情報は提示されているもの[3]の、作行きの優秀さを鑑みれば、より詳細な報告ならびに写真の提示を行うことが望ましいと思われた。このため像を奈良国立博物館にいったん輸送し、X線透過撮影と高精細デジタル画像撮影、ならびに綿密な調書作成を行いたい旨を寺に対してお願いし、快諾を得た。

本像を実際に奈良国立博物館に輸送し、諸種の撮影及び調査を実施したのは、平成二十七年（二〇一五）六月十一日・十二日であり[4]、後述のとおりの成果を得た。同年十二月二日に寺内で実施した追加調査[5]の成果を含め、詳しく報告を行い、今後の研究に資したい。

なお、各項目の執筆担当者についてはそれぞれの部分の末尾に明記した。X線透過撮影は鳥越と大江、蛍光X線調査は鳥越、高精細デジタル画像撮影は佐々木が担当した。また原稿に関する全体の調整は岩田と山岸、編集作業は主として岩井が担当した。

（岩田・山岸）

1　像の基本データ

本像は、総高二三七・一cm、像高（本体）七三・〇cmの騎獅像で

図3　同　右側面

図2　文殊菩薩騎獅像　左側面

図5　同　背面

図4　同　左斜側面

図７　同　右斜側面

図６　文殊菩薩騎獅像　顔・正面

図９　同　右側面

図８　同　左側面

ある（図1）。以下に、形状、法量、品質構造、保存状態、銘記、伝来の順に記述する。

【形　状】

本　体（口絵5、7、図1～12）

高い宝髻を結う。髪束は各三段、上方より五束・三束・三束とする。宝髻上に上下二段に八字文殊の標幟を表したか（亡失）。元結紐は上下各二条、上部元結紐の上方に扇状の飾りを表す。天冠台は、上から列弁・紐二条とし、両耳上では下向き、正・背面では上向きに弧を描き、正面及び両側面に半截の花形飾り各一個を表す。頭髪はすべて束ね目入り毛筋彫り。鬢髪一条が耳前に垂れ、さらに一条が耳をわたる。髪の一部は、天冠台正面では半截花形飾りの両側で天冠台に巻きつくようだが、前面においては毛筋を刻まず、かつ漆箔が押され、表現としては不審。両側面では髪が花形飾りの中心をくぐり、さらに花形飾りの前で天冠台に巻きつく。天冠台下の地髪正面には、左右計五個の菊座を伴う垂飾（銅製）を表す。

白毫相（水晶）を表す。半眼、閉口。鬢のほつれ毛、口髭・顎鬚を表す（墨描）。口唇部を周囲から一段彫りくぼめ、上唇の上縁を紐状に表す。鼻孔・耳孔を穿ち、小孔を像内に貫通させる。耳朶は紐状で貫通する。顎のくくり一条、三道を表す。胸のくくり左右各一条、腹のくくり一条を表す。

着衣は、覆肩衣・袈裟・裙を着ける。覆肩衣は右肩から前膊までを覆い、右胸下方で袈裟にたくし込まれて一度たるみ、裏を見せる。袈裟は左肩を覆い、右肩に少しかかって腹前にまわり、再び左肩にかかる。腹部から左肩にかけて縁を大きく折り返す。なお、袈裟は

図10　文殊菩薩騎獅像　胸飾

図11　文殊菩薩騎獅像　截金文様　正面左腋部

図12　文殊菩薩騎獅像　像底

右膝にかぶさる。裙は腹前の袈裟の下にあらわれ、正面中央で左前に合わせる。

装身具は、胸飾と両腕の腕釧（各金銅製）を付ける。胸飾（図10）は、基本帯を上から紐一条、連珠、紐一条、列弁で表し、その中央に大一（上下に小玉を各一個付ける）、両端部に小一（内側に小玉一個を付け、上下に菊座各一個を下に重ねる）の、中央部が前向きに突起した円形菊座を付ける（X線透過画像から、この円形菊座が胸飾を留める鋲を兼ねていると判断される）。両端部に珠繋二個を表す。基本帯に唐草が絡みつくように配され、中央で両側からの唐草が合体し、唐草から垂飾を垂らす。垂飾は露玉と銅製透彫金具からなり、当初は垂飾を七箇所から垂らしていた（現状では中央と向かって右から二番目の垂飾のみ金具が残存し、中央の垂飾は一部後補。向かって左から二番目の垂飾は完全に亡失）。腕釧は紐二条の帯に、右手では外、左手では内に、四方に小玉の付く円形菊座を表す。

左手を屈臂して掌を内に向けて第一～四指を捻じ、経巻の載った蓮の茎を執る。右手は垂下、右膝のやや上にて掌を内に向け、五指を捻じて三鈷剣の柄を握る。ごくわずかに左方を向き、右足を外にして獅子上の蓮華座に半跏趺坐する。

図13　文殊菩薩騎獅像　光背（頭光・部分）

図14　同　身光（部分）

光　背（口絵6、図13、14）

二重円相光。

頭光の中心に八葉蓮華を表す。八葉蓮華の中心の蓮肉は十三個の蓮実を表し、周縁に一条の陰刻線を入れ、さらに輪郭は八方入隅とする。蓮肉の周囲に蘂を表し、その外側に如意頭状の輪郭をなす蓮弁（複弁）を八枚表す。頭光の圏帯には、中央に木瓜形の突起をともなう楕円形の菊座を持つ飾りと、中央に円形の突起をともなう菊座を持つ唐草飾りとを交互に合計八個（各四個）配する。その外縁は内側から紐二条、列弁帯とする。身光の圏帯は内外二区に分かれ、内区は左右最上部に何かしらの飾りがあったと見られるが亡失し、外区は頭光の圏帯と同じパターンで合計八個（左右各五個）の飾りを表し、さらに内側から紐二条と列弁帯で縁取る。光脚の表・裏に蓮弁を浮彫する。この蓮弁は五弁間弁付で、各弁の中央に三葉形ならびに弁脈を表し、縁は左右とも内向きに巻きこむ。さらに上縁部に蘂を表す。頭光周縁部は頂部に胎蔵界大日如来像（宝冠を戴き、冠繒を付ける。条帛・裙を着け、左手を上に禅定印を結び蓮華座上に坐す。）、両側に各二軀の飛天（いずれも双髻を結い冠繒を付け、天衣、裙を着け、雲上に舞う姿に表される）を配し、それらの冠繒、天衣、裙裾および雲形を火焔状に表す。身光部周縁には透彫唐草を火焔状に表し、その間に左右各四個の円輪を蓮華座上に配する。円輪中に梵字各一字が記され、文殊八字真言が表される。梵字（𑖌オン・𑖀アク・𑖨ビ・𑖭ラ・𑖫ウーン・𑖮キャ・𑖯シャ・𑖭ラク）は、上から下に、右、左の順に配する。

台　座（図1）

獅子座。獅子は蓮華座を背中の鞍上に載せ、頭を左方に向け開口して、方座上に立つ。

（岩井）

［法　量］　単位cm

総高二三七・一

本　体

像高七三・〇（二尺四寸一分）　髪際高五四・五（一尺八寸）

頂―顎三二・八　面長一四・〇　面幅一一・九

耳張一五・八　面奥一六・三　胸奥二〇・三

腹奥二五・〇　肘張四〇・一　膝張五三・〇

坐奥四四・一　膝高（左）一一・七　（右）一一・七

光　背

高一〇八・七　幅七八・九

獅　子

像高（頭頂）一一八・四

（岩井）

図15　文殊菩薩騎獅像　X線透過画像　正面

図16　同　側面

図17　同　斜側面

【品質構造】

本　体

針葉樹材。一木割矧造か。内刳。金泥塗り、截金文様。玉眼。

表面観察およびX線透過画像（図15～17）により、本像の構造については次のように解釈しうると思われる。

まず頭部を見ると、両耳後を通る線、後頭部中央を縦に通る線、前頭部中央の地髪から天冠台にかけての位置を縦に通る線が、肉眼で確認できる。X線透過画像を見ると、両耳後を通る線はそのまま真っ直ぐ体部に達すると見えるが、頭部中央を縦に通る線については体部に連続するか否か確定できない。またX線透過画像によって、頭体の木目は同方向に通ると見える。

以上により、頭体を通して針葉樹の縦一材から彫成し、両耳後を通る線にて前後に割矧ぎ、頭部については割首の後、さらに左右に割矧いでいる可能性が高いかと思われるが、割矧ぎではなく寄木である可能性も皆無ではない。三道下で割首すると思われ、背面襟際で斜めに鉄釘を打ってこれを留める。宝髻は別材製。宝髻束ね目の上段五ヶ所、中段三ヶ所に小孔を穿っており、元は別製の八字文殊の標幟を枘挿ししたと見られる。冠繒は別製（亡失。天冠台側面の半截花形飾り中央の孔および両肩下がりにある各一個の小孔がこれに関わると見られる）。天冠台前半に都合五個の小孔があり、かつて別製飾りを挿したものとみられる（すべて亡失）。

両体側部は肩下がりにて各縦一材を矧ぐ。肩の矧ぎ目に左右各二本の雇い枘を設けて緊結する。左前膊半ばから先の部位の袖は左右各一材とするか。右前膊半ばから先（袖を含む）に一材を矧ぐ。左前膊部（肉身）、右手首先を各別材製とし、挿し込む。

頭部、体幹部および両体側部に広く内刳を施す。像底（図12）に底板を貼り、都合五本の鉄釘を打ってこれを固定する。底板前方中央の裳先裏に縦三・八cm、横五・四cmの方形板状の枘を三本の釘で打って留めていた痕跡があるが、現在は亡失。これは像本体と台座との固定を計った仕様と考えられる。

表面の仕上げは次のとおり。

肉身・着衣ともに漆塗りの上に白下地とし、さらに丹と見られる淡紅色の顔料を重ねたうえで、金泥塗りとする。像底も同じだが、漆塗りの下に布貼りが認められる。

頭髪は群青を塗り、髪際に緑青の線を引く。髻の元結紐は朱を塗り、髻上方の扇状の飾りと天冠台は漆箔押し。髪際および鬢のほつれ毛、髭、鬚は墨で描く。玉眼は黒目に墨を塗り、茶色がかった赤色でその輪郭をくくり、目頭・目尻を青でぼかす。唇に朱を塗る。

着衣に次の截金文様が認められる。（口絵7―1～4、図11）

袈裟（表）：田相部は雷文繋ぎ文。条葉部は蓮華唐草文。

同（裏）：内区は外形が杏仁形を呈する雷文。縁に蓮華唐草文。

覆肩衣（表）：二重斜格子文と四弁花（ないし四菱）入りの七宝繋ぎ文との重ね文様。

同（裏）：亀甲文と籠目文との重ね文様。

裙（表）：　卍字繋ぎ文の地に蓮華丸文（カ）を散らす。

袈裟（表）の田相部と条葉部との境界、袈裟（裏）の内区と縁との境界、丸文の輪郭は、いずれも太線一条と細線二条で画す。

白毫は水晶製、嵌入。天冠台正面に下げる飾りの基部（鐶と菊座）・胸飾・腕釧は銅製鍍金。[6]

光　背

針葉樹材。金泥塗り、截金文様。

構造の詳細は不明の点もあるが、角枘の中央に縦方向の矧ぎ目があり、これは光脚の上端まで達する。これにより、二重円相部は通して左右二材矧ぎかと推測される。光脚は正・背面から各一材を貼り足す。頭光中心の蓮肉は別材製で、上下二材矧ぎか。頭光周縁部は、各尊像およびその着衣部と下方の雲形を一材から彫出し、都合五材からなる。身光周縁部は、左右とも上下二材から彫出する。周縁部の各区（頭光五、身光四）は二重円相の小口に枘挿しする。ただし現状では、一部を除いて二重円相の最外縁に小孔を穿ち、これに銅線を通して固定している。頭光圏帯および身光圏帯外区に白銅板を貼り、これに金銅製透彫[7]の飾り金具を打ち付ける。身光圏帯内区の最上部は、左右ともに金泥の輝きがよく残り、また小孔各一個が認められることから、当初ここにも金銅製の飾り金具があったと思われる。身光周縁部の梵字を表す円相は、縁近くに釘孔が点在することから、銅製覆輪をめぐらせていた可能性がある。

表面は、二重円相、光脚、周縁部ともに金泥塗り。金泥は光脚の底部および角枘前面にも施される。

身光圏帯内区は、截金で籠目文と七宝繋ぎ文との重ね文様を表し、籠目の辻には、内側六個、外側六個の截箔を円形に配して花文風に表す。頭光中央の八葉蓮華の蓮弁と、光脚の蓮弁、身光周縁部の透し彫り唐草、および梵字を表す円相に付属する蓮華の蓮弁に、同じく截金で弁脈ないし葉脈を表す。頭・身光ともに最外縁は漆箔。

頭光周縁部の五軀の尊像は、頂上の大日如来像および後補の飛天③（左下）を除き、漆塗り、白下地の上に、さらに丹かと見られる淡紅色の下地を施し、金泥を塗る。大日如来像については金泥の下の淡紅色が見えない。

大日如来像、飛天①（左上）・②（右上）・④（右下）は頭髪に群青を塗る。

大日如来および飛天①・②・④の着衣には、いずれも截金で次の文様を表す。

大日如来：冠繒は雪の結晶風の花文。条帛は斜格子文。裙（表）は雷文繋ぎ文。裙（裏）は袈裟襷文。

飛天①：冠繒および天衣は雪の結晶風の花文。裙（表）は雷文繋ぎ文。裙（裏）は斜格子文。

飛天②：冠繒・天衣は①に同じ。裙（表）は麻葉繋ぎ文か。裙（裏）は籠目文か。

飛天③：（後補につき省略）

飛天④：冠繒・天衣は①・②に同じ。裙（表）は麻葉繋ぎ文。裙（裏）は斜格子文。

身光周縁部の円相は、白色に塗り、金泥で梵字を書く。

（岩田）

【保存状態】

本　体

宝髻上に表された八字文殊の標幟すべて、冠繒、天冠台に付属する別製飾りすべて、胸飾の垂飾の一部、像底前方の方形板状枘、以上亡失。宝冠、持物、胸飾の垂飾の一部、以上後補。

光　背

飛天①は右腕前膊、②・④は両腕前膊を亡失する。飛天③およびその着衣すべてと雲座の一部は後補。頭・身光周縁部の一部に亡失

箇所および後補の箇所がある。

台　座

獅子座は後補。蓮華座は他からの転用か。

（岩田）

【銘　記】

頭部内に以下の梵字が墨書されることがファイバースコープを用いた観察により確認される（図18～19）。

（以下五字、右から左に横一列に）

𑖀（イー）

□（不明）

𑖨（バン）

𑖩（バイ）

𑖪（バー）

これら五字の上に文字は見られない。下方は錦包、紙包に妨げられており、真言や陀羅尼の最上列ではないと断定することはできないが、字間が開き気味であり、𑖀（イー）のように真言・陀羅尼中に用いられることが稀な字を含むことから、種子である可能性が大きいと考えられる。その場合、𑖨（バン）は金剛界大日如来を表し、

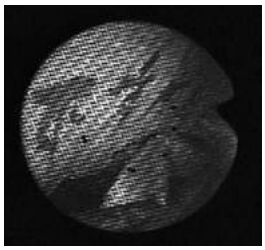

図18　文殊菩薩騎獅像
像内頭部墨書
梵字

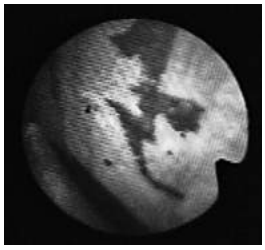

図19　文殊菩薩騎獅像
像内頭部墨書
梵字（不明）

また𑖀（イー）は帝釈天、𑖩（バイ）は毘沙門天、𑖪（バー）は風天で、確認できなかった他の梵字とあわせ八天ないし十二天をなす可能性が考えられる。

他に梵字としては𑖮（ア、種子とすれば胎蔵大日如来ほか）、𑖬（キリーク）か（種子とすれば阿弥陀如来）、𑖭（オン、種子とは考えにくい。真言もしくは陀羅尼の初字か）などがあるが、ファイバースコープの挿入角度の限界もあり、現時点で全貌を明らかにしえない。

（山岸）

【伝　来】

一、現在、本堂内外陣東端の脇間内に安置される。

二、明治二十年（一八八七）にまとめられた『社寺宝物古文書目録』（奈良県立図書情報館蔵）の添上郡法華寺村法華寺の項にみえる「一文珠菩薩（ママ）　運慶ノ作　壹体／但シ彩色座木像／長ケ貳尺五寸獅々長ケ三尺壱寸」にあたるとみられる。それ以前の伝来は知られない。

（山口）

2　納入品について

冒頭に述べたとおり、本像内には納入品が存在する。以下に今回の調査で得られた知見に基づき、その概要と考察を行う。

【納入品の概要】

X線透過撮影で得られた画像（図15～17）により、像内頭部に左記納入品が確認される。

一、金属製（銅製鍍金か）火焔宝珠形舎利容器　一基　高約八cm

台座上に安置した水晶製（か）宝珠形容器（舎利数粒を納入）がほぼ白毫の奥の位置にあたるよう設置される。火焔は四方に立ち上がる。宝珠形容器は蓋・身に分かれ、蓋を貫く芯棒状のもので固定される。台座は上より請花（蓮肉・蓮弁別製。蓮弁は四段か）・上敷茄子・華盤・下敷茄子・受座・反花・蛤座・框（以上すべて平面円形か）からなる八重蓮華座であり、上敷茄子以下は芯棒で接続される。

図20　文殊菩薩騎獅像
像内頭部納入
火焔宝珠形舎利容器（火焔部分）

二、水晶製（か）球形舎利容器　一個　径約三cm
右眉の奥の位置にあたるよう設置される。舎利数粒を納入する。

一の宝珠部分と透過度が近く、同様に水晶製と判断される。上部に宝珠形もしくは球形のつまみをもつ蓋がある。

三、金属製円筒形舎利容器　一個　高約二cm　径約一cm
頭部内内刳の下寄りに位置する。舎利数粒を納入する。蓋に比べ身の透過度が高いのは身が薄作りなためか。

四、水晶製（か）五輪塔形舎利容器　一基　高約四cm
三と隣り合う。一の宝珠部分及び二と透過度が近く、同様に水晶製と判断される。水輪内に空洞部があり、元来は舎利容器とみられる。平面八角ないし六角の可能性がある。

五、舎利（か）
三、四に隣接して数粒の粒子が認められる。

六、円筒形容器（か）　高約六cm　径約四・五cm
後頭部内刳り内に納入される。

いっぽうファイバースコープを用いた観察で以下のことが知られ、また関連して推測された。

上記一は、眉間内部で金属製火焔が紙包の上部に突出し（図20）、その火焔にいずれかの紐が懸かり、さらにその上に山状に折られた紙包が載るさまが確認される。ただし一の水晶製（カ）宝珠以下の部分は見えず、紙包の中に包まれると推測される。上記二、三、四、五、六は確認することができなかった。紙包ないし錦包に内包されると推定する（関連して、三、四はX線透過画像を見ると傾きがそろっており、同包される可能性が高い）。

また、像内体部には左記納入品が確認される。

体部内刳り内の底部には、折りたたんだ紙のようなもの（冊子か）が塊状に納置される。同中央後方には、木製と思われる円筒形容器（高約二五cm）が認められ、内部に複数の巻子とみられる納入品、及びその上部に折りたたんだ紙のようなものが重ねられる。体部内刳り内右寄りにも、円筒形容器に納められているかと見られる複数の巻子状の納入品が確認される。このほか、右体側材の内刳り内にも複数の巻子状の納入品が認められる。

（山岸・山口）

【納入品についての考察】

像内頭部納入品一の火焔宝珠形舎利容器は、形姿が奈良・海龍王寺金銅火焔宝珠形舎利容器（正応三年：一二九〇）などと似通うが、規模が小さいこともあってか概形に締りが感じられる。海龍王寺舎利容器には晩年の叡尊（一二〇一～九〇）が関与したことが『西大勅諡興正菩薩行実年譜』より知られる。また一の舎利容器は、ほぼ白毫の奥の位置に設置されており、奈良・般若寺の鎌倉再興期本尊文殊菩薩像において、造像を主導した叡尊の文永六年（一二六九）の願

文中に「鏤仏骨以代白毫、宜照無明之痴闇」（仏骨を鏤めて以て白毫に代ふ、宜しく無明の痴闇を照すべし）と記されることが留意される。また、般若寺像は大般若経六百巻をはじめ像内に多種多様な納入品を奉籠していたことが知られ（『感身学正記』）、本像の場合これと通ずる点も注目される。

二の上部に宝珠形もしくは球形のつまみをもつ蓋がある球形舎利容器の形状は、建久九年（一一九八）の滋賀・胡宮神社金銅三角五輪塔形舎利容器の内容器（径四・七㎝）や、建保六年（一二一八）から寛喜元年（一二二九）の奈良・興福寺千手観音菩薩立像納入とみられる水晶製（か）球形舎利容器（径約四㎝）と近似する。

納入品を錦や紙に包む奉籠法は、建長元年（一二四九）善慶作の奈良・西大寺釈迦如来立像の場合と一定の類似を示している。

（山岸・山口）

3　制作環境をめぐる考察

一、本像は袈裟を着ける服制に特色がある。類品としては、ともに鎌倉時代初頭の制作とみられる京都・智恩寺文殊菩薩像および奈良・興福寺東金堂文殊菩薩像（ただし下層に着甲）などが知られるが、南都伝来という点に注目すれば、奈良・般若寺周丈六文殊菩薩像との関係に思い至る。般若寺像は、西大寺叡尊が発願し、建長七年（一二五五）から文永四年（一二六七）にかけて仏師善慶・善春父子により造立されたが、延徳二年（一四九〇）に焼失した（『大乗院寺社雑事記』等）。ただし、天文十一年（一五四二）銘の騎獅文殊菩薩像版木及び元禄年間（一六八八～一七〇四）開版とされる文殊五尊像版木（いずれも般若寺蔵）も袈裟を着ける姿であることから、延徳二年火災後の再興像も同様だったと推定される。さらに、この再興像は、文亀二年（一五〇二）に高天仏師大弐（好尊）によって造像が始められたと知られ（『大乗院日記目録』）、大弐の起用は先祖が文殊菩薩像を造立した因縁によるとされる（『大乗院寺社雑事記』）ことから、旧像の図像を踏襲した状況が想定され、ひいては延徳焼失以前の文殊菩薩像も袈裟を着けていたと考えることができる。なお関連して、般若寺像は大般若経六百巻をはじめ像内に多種多様な納入品を奉籠していたことが知られるが（『感身学正記』）、先述のように本像もこれと通ずる。

二、寛元から建長年間（一二四三～五六）にかけて、叡尊は法華寺で大比丘尼戒や沙弥尼戒を授け、経論を講ずるなど旺盛な活動を行った（『感身学正記』）。嘉元二年（一三〇四）の『法華滅罪寺縁起』や法華寺旧蔵の鰐口（興福寺蔵）の刻銘から、建長年間に行われた法華寺再興も叡尊の尽力によるところが大きかったと推測される。本像の大まかな衣文のあしらいや、厚みのある上体の表現は、鎌倉時代後期へとつながる要素であり、制作時期は建長年間頃を上限とする十三世紀第3四半紀がひとつの目安になるかと思われる。

三、本像の作家系統については、いまにわかに判じがたい。ただし、叡尊の知遇を得てその造仏の主要な担い手となった善慶・善春作の諸像にみる、目鼻を明快に刻み出す顔立ちや切れ味のよい着衣の彫り口とは、いくぶんおもむきが異なるようにも思われる。また、これに関連して三本周作氏は、鎌倉時代前・中期における仏像の金属製荘厳具に着目するなかで、本像の胸飾の意匠形式が建長八年（一二五六）快成作の奈良国立博物館愛染明王像や、いずれも康円作の東京・世田谷山観音寺不動明王像（文永九年：一二七二、内山永久

寺旧蔵）及び京都・神護寺愛染明王像（文永十二年：一二七五）などと一致することを指摘している。[8] 一方、光背については、永仁二年（一二九四）法印院修ほか作の和歌山・常喜院地蔵菩薩像をはじめ、主として院派仏師の作品とのあいだに類似が認められるという。[9] 今後、こうした指摘もふまえて制作時期や作家系統を検討してゆく必要があるが、詳細は後考に委ねたい。

（山岸・山口）

参考文献

東京美術学校編『法華寺大鏡』（『南都七大寺大鏡』第廿六集、南都七大寺大鏡発行所、一九二四年）

工藤圭章「般若寺の歴史」（『大和古寺大観　第三巻　元興寺極楽坊・元興寺・大安寺・般若寺・十輪院』所収、岩波書店、一九七七年）

太田博太郎「法華寺の歴史」（『大和古寺大観　第五巻　秋篠寺・法華寺・海龍王寺・不退寺』所収、岩波書店、一九七八年）

水野敬三郎「文殊菩薩騎獅像　本堂所在」（同右所収）

奈良国立博物館編『興正菩薩叡尊七百年遠忌記念　西大寺展』（一九九〇年）

奈良国立博物館編『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（二〇〇一年）

田邉三郎助「千手観音菩薩像　興福寺」（水野敬三郎他編『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記篇　第四巻』所収、中央公論美術出版、二〇〇六年）

田邉三郎助「釈迦如来像　西大寺」（水野敬三郎他編『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記　第六巻』所収、中央公論美術出版、二〇〇八年）

三本周作「鎌倉時代前・中期における仏像の金属製荘厳具―意匠形式の分類と制作事情を中心に―」（『佛教藝術』三一三号、二〇一〇年）

いわい・ともじ／奈良国立博物館情報サービス室長

いわた・しげき／奈良国立博物館上席研究員

おおえ・かつき／奈良国立博物館研究員

ささき・きょうすけ／奈良国立博物館資料室員

とりごえ・としゆき／奈良国立博物館保存修理指導室長

やまぎし・こうき／奈良教育大学教授

やまぐち・りゅうすけ／奈良国立博物館研究員

注

（1）法華寺友の会世話役　出野達夫氏の周旋による。

（2）平成二十四年十二月二十八日調査の参加者（一部参加を含む）は山岸及び西山・金原両氏のほか、宮武杏名（奈良教育大学大学院生）・周鑫（奈良教育大学研究生）・赤津將之（奈良教育大学学生）であった。なお調査を通じ、樋口師ならびに渡邊英世師（法華寺執事）より一方ならぬご高配を賜った。記して謝意を表する。

（3）参考文献の水野解説。

（4）調査参加者は次のとおり。
山岸公基（奈良教育大学）
岩井共二・岩田茂樹・大江克己・佐々木香輔・鳥越俊行・山口隆介（以上、奈良国立博物館）

（5）注4に掲げたメンバーのうち、大江を除く六名による。

（6）肉眼による観察では金色を確認できないが、蛍光X線分析調査の結果、金（Au）が検出されたため、鍍金が施されていると判断されるにいたった。

（7）（注6）に同じ。

（8）参考文献の三本論文。

（9）同右。

奈良国立博物館研究紀要
鹿園雜集　第十七号・第十八号

平成二十九年一月三十一日発行

編集発行　奈良国立博物館
〒六三〇-八二一三
奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本　株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地